

卒業生紹介

海と人の心を結ぶ ～環境保全のスペシャリスト～

Ashikaga Yukiko
足利 由紀子

カプトガニとの出会い

大分県中津市沿岸には、総延長約 10km、沖合 3km、面積 1345ha という瀬戸内海最大規模の干潟がある。そこに「水辺に遊ぶ会」が発足して、16年。足利由紀子さんは、理事長として、中津の干潟の状況とそこに生息する生物を詳細に調査し、把握した情報に基づき環境を保護するための様々な啓発活動を展開、海域環境と生態系の保全の重要性を説いてきた。活動を始めた時は、埋め立ての危機にあった無名の干潟であったが、保全活動がCOP10の「世界湿地賞」(世界湿地ネットワーク)をはじめ、「ユネスコ日本未来遺産」(日本ユネスコ協会連盟)、沼田眞賞(日本自然協会)、「手作り郷土賞」(国土交通大臣)などの賞を多数受賞し、今や日本を代表する「中津干潟」として、世界にも知られるようになった。

もともと自然保護や環境保全に興味があり、生物学に入学した。学生時代は、日本野鳥の会本部及び東京支部で観察会や野外体験のボランティアやネイチャーキャンプのサブリーダーを行いながら、生物調査や環境保全の手法を学んだ。卒業研究では、千葉県館山市の海をフィールドとした無脊椎動物の形態分類の研究を行い、卒業後は、自然や生き物を紹介する映像の制作に関わりたいと考え、日本初の動物映画「キタキツネ物語」を制作した株式会社サンリオに入社した。児童書の出版、広告デザイン業を経て、結婚を機に1991年に大分県中津市に転居。フリーデザイナーとしての仕事と子育てを行いながら趣味の野鳥観察を続けていた。

1999年に中津港の拡張工事に伴い、隣接する海岸を白浜ビーチにする計画が生じ、地元民の話合いが始まった。「生き物好きでしょ」と足利さんにも声がかかる。「どんどころか見に行こう。」ぬかるみに足をとられながら歩くと、干潟の表面にトゲトゲしたものがある。手に取ってみたら、カプトガニの幼生だった。「教科書でしか見た事がない貴重な生きものが手のひらの中で必死に脚をうごかしていたの。埋め立てていけないじゃない。」まずは、干潟のことを皆で勉強し、観察会を実施して地域の人に知ってもらおうと、職種も年齢もバラバラの6人で「水辺に遊ぶ会」を発足。一番若くて時間も自由な足利さんが代表に指名された。



市民による調査と保全活動を展開

環境保護団体は強硬な反対を行うものが多い。しかし、それでは立ち行かなくなることは学生時代のボランティアの経験で分かっていた。「私が代表になるのなら闘争型の保全活動はしない。徹底的に話し合う方法で行う。」足利さんは、干潟の覆砂

NPO法人「水辺に遊ぶ会」理事長

1987年お茶の水女子大学理学部生物学科卒業。日本文理大客員教授・環境省環境カウンセラー・環境省希少野生動物種保存推進委員・環境省自然公園指導員・大分県環境教育アドバイザー・大分県希少野生動物保護推進員ほか。長野市出身。

事業にのみ反対し、今後の海岸と人とのあり方を考える協議会の設置を県に要請した。そして、行政、市民、専門家、自然保護団体などの幅広いメンバーが公開で行う協議会で、その調整役を担った。自己主張するのみでなく、他の価値観も許容し、自ら調査を行い、企画書を作成する。とことん議論を重ねた末に、干潟を保つ合意形成に至った。

足利さんは、「地域の自然環境を保全する上で重要なのは、地域住民の理解を得るための啓発と現地調査に基づく自然環境の的確な状況把握です。地域住民と社会の意識の醸成が鍵となります。」と説く。「水辺に遊ぶ会」では、市民の手で生息する生物種を調べ(底生調査)、地形や干潟の土壌を調べる(測量や底質調査)という新しいスタイルで、専門性の高い調査研究を継続して実施した。そして、アオギス、カプトガニの他にも多くの希少種を含む、多種多様な生物が、陸と海を繋ぐ干潟の緩い勾配の中で棲み分けて生息していることを知る。調査結果は、中津干潟レポートや学術雑誌に報告する他、

「水辺に遊ぶ会」のホームページで発信している。一方、沿岸の環境保全を行うには、利害関係のある漁業者の理解と協力が必要となる。漁業者にヒアリングを行って、後継者不足や資源の枯渇などの問題を知った。漁業者の問題解決のために専門家を紹介し、自らが漁や販売の手伝いを行った。市民には、地元の魚を使ってもらえるように料理教室を開催し、漁業者との協働によるイダコ漁や海苔すき体験を実施した。子供達の笑顔は大きな力となって、市民の中津干潟に対する認識が飛躍的に高まった。「海を良くするためには、川も山も良くしないといけない。」保全活動の場を中津干潟と中津干潟を形成する山国川水系の水辺環境へと広げ、昨年末までに実施した啓発活動は、主催自然観察会や行事が149回、教育現場での環境学習が397回にも上った。「水辺環境を守るためには、まず、身近な水辺環境を知り、好きになることが大事。時代が豊かになるにつれ、人々の足が遠のいてしまった。海と人の心の距離を取り戻したい。100年後の子ども達にも残すために。」

ネイチャーセンターの開設と後継者の育成をめざして

子どもの頃、自然が好きなお父に手を引かれ、近くの川や公園や雑木林に行った。花や虫、鳥を見て遊び、身近な生命や自然の魅力にとりつかれた。それが自然保護をライフワークとしたいと思うようになった原点だという。「大学生の間は、自然保護団体でとてもかわいがってもらった。自分がもらったものは、だれかに返したい。」しかし、日本の環境団体は高齢化が進んでおり、自然科学系に興味があつて調査研究をするスキルを持った20～30代の若者が育っていないと嘆く。「特殊な環境に行かなくても、身近な場所でも自然は充分に楽しめるし、学ぶことができる。経験値をあげないと、興味を持つ若者は出てこない。さらに、良い指導者との出会いが大事。」うれしいことに、「水辺に遊ぶ会」で育った子が大学生になって研究をしに干潟に戻ってきた。親になって子どもをつれてくる人も増えてきている。

8年前には、韓国のNGOが中津干潟に視察に訪れていたが、今は足下にも及ばない状況だという。韓国はいち早く東アジアの海洋保護のリーダーになると宣言し、各地に拠点となるセンターを配置、若いスタッフを海外に派遣して専門知識を学ばせている。若者が生き生きと働き、各地の拠点で保全活動と生業の共存、地産地消やツーリズムが成功している。驚いた。「自然保護はボランティアがやるものという国の考えでは、次世代を育てることもできない。」

後継者の育成が急務であるが、そのためには、助成金に頼らず自分たちで持続可能な活動ができるようにならなくてはならない。「子ども達がいつでも寄って環境学習ができるネイチャーセンターを作り、そこで若い人材を育てたい。」強い思いを胸に、次の目標に向かって動き出している。

文責：基幹研究院自然科学系准教授 近藤 るみ

わたしのオフタイム

フィギュアスケートの観戦へ！
お茶大ではフィギュアスケート部
に入っていました。